

ストレンジデイズ

うさぎ

小春日和の日曜日、午後の公園は散歩にちょうどいいのかもしれない。子供と仲良く歩く同じ年や少し上くらいの夫婦や手をつないで楽しそうに会話をしている若いカップルなどいろんな人々をネット越しに眺める。何組かは僕たちがやっていることに興味を示して止まる。

僕もそうなりたいたいと思って、自分と彼女をその二人に重ね合わせる。幸せってこういうのでいいのかもしれないと感じる。ビツクになりたいとか金持ちになりたいとかそういう大きい夢みたいなのより、安心して眠れる彼女の側に居たいと願う。彼女であるミズホと不自由しない程度のお金でゆつくりと生活できたらと思う。

突然の金属音で僕の意識が野球に戻される。球は僕の守っているライトとセンターの中間辺りに飛んできている。センターから走ってくる仲間の足が遅いので、僕が「オーライ、オーライ」と声をかけながら走り込む。飛んでくる玉が、勢いを無くし重力に引つ張られて落っこちてくる。僕のスピードと玉の落下速度を計算すると、捕球するにはギリギリだった。「間に合わない」なんて思ったなら、絶対に間に合わないから後ろ向きなことは一ミクロンも頭では考えない。全力に走って間に合わなかったら、僕の日頃の努力が欠けているっていうことだ。僕はスピードを上げて加速する。その時、若干強めの風が僕の背中を押した。しかし、ボールには向かい風になるので、僕が再計算して落下ポイントを修正する。このままでは取れないと判断して、スライディングをした。グローブを掲げてボールを取ったことを審判にアピールする。審判が三つ目のアウトを宣告して、攻守交代となった。

「ナイスプレー」

チームメイトとそれぞれハイタッチをする。でも、褒められるのは恥ずかしかった。この草野球チームの監督兼選手である僕の高校の同級生が笑顔を浮かべて僕に近寄ってくる。

「シユン、ナイスだよ。お前、今日は調子良さそうだな」

「またまたあ、そういう前フリをして打つんだろ？ 彼女も来てるんだし」

「そんな思春期みたいな頑張りほしくないよ」

そう言いながら、ベンチから出てネクストバッタースークルで軽く素振りをする。

ミズホは、今日の試合を観戦に来ている。バックネットで僕たちのベンチの近いところで見ている。その姿はまるでプロ野球選手の練習を釘付けで見ている子供のようだった。

僕は監督がかけた呪いの言葉が頭をよぎる。ミズホを見ると、僕と目が合うと「頑張つて」と口パクで言っていた。

ミズホのことを遮るために、ヘルメットを目深にかぶって滑り止めスプレーをバットに吹きかけた。

前の打者も、その前の打者もフォアボールで、九回の裏ノーアウトランナー一、二塁の状況で僕に打席が回ってきた。野球の神様は僕を試しているようだった。僕が、ホームランを打てば逆転でヒーローになるし、最悪のゲッツーが出ればA級戦犯者になる。

僕は一息大きく息を吐いてバッターボックスに立つ。

外野手の前で落ちるようなヒットを打つイメージをして、僕はバットを一度振る。そして、僕が構えるとピッチャーもセットする。相手がサインを確認し投球フォームに入る。僕は息を止めた。早いボールが僕の立っている位置より外のところに来る。僕は一瞬だけ迷うが見送った。

「ボール」と審判の曇った低い声がする。そこで初めて僕は呼吸をする。両チームのまばらな声援が聞こえる。

僕は、もう一回最初と同じことをする。さっきより早いリズムで

ピッチャーが投げってきた。さっきより、内に入ってちようどいい高さでボールがやってきた。僕の腕が自然に出て行く。打った瞬間に感触があった。打たれた白球は高く遠くへと飛んでいく。その場にいた全員が同じ方向を見つめる。外野手は全員上を見上げながら追いかけるのを止めた。ボールは、フェンスの上を通り越して草が生い茂ったライトスタンドに入った。

チームの全員が僕を出迎えるためにベンチを出てきた。僕はみんなにガッツポーズをした。三塁ベースを踏む時にミズホがネット越しに見える。彼女は自分のことのように飛び跳ねながら喜んでいて、僕がその日のヒーローになった。

「乾杯」

僕とミズホはグラスを軽くぶつけた。

「大丈夫なの？ みんなと一緒にじゃなくて」

「みんなと一緒にだと、ミズホに悪いよ」

「だって、今日の主役だよ」

彼女の瞳が少し大きくなった。何かを訴えてきている。たまにこのようなことを彼女はするが、僕には彼女のメッセージが一度も読み取れないでいた。

「僕はミズホと居たいんだ」

「わかった」

トーンが一個高くなった返事が聴こえた。僕の応えは間違いではなかったようだ。少し安心する。

「だけど、今日のシュンくんすごかったねえ。ホームランだよ。普通は打てないよお」

子供にインタビューをされているみたいでくすぐったかった。

「まあね」

「かっこよかったなあ」

彼女は本当に幼い反応をする。一口しかグラスに口をつけていないのに、彼女は酔っぱらっているようだった。

彼女の行動を肯定するなんて、自分がバカなのかもしれない。だけど、付き合ってから初めて僕が草野球をやっているとところに彼女は来たのだ。そして、たまたま今日は僕が活躍したのだ。だから、もしかしたら他の人でもこんなにも喜ぶのかもしれない。彼女と長い間一緒にいると僕たち自身が客観視できなくなる。

僕とミズホは付き合ってから二年になる。付き合ったきっかけはお互いの友人が主催した合コンだった。その時の彼女のことを今でも覚えていて。だれに対しても同じ反応して、もしかしたらぶりっ子とかそういうイタイ子なのかもしれないと思った。一次会が終わった時の男性陣のミーティングでも「気をつける」みたいな話で要注意人物になった。

でも、二次会のカラオケの時に僕の彼女に対する印象が変わった。みんな最初は同じ部屋に居て、歌う人と喋る人に別れていた。彼女はどこに居たかと言うと、歌ってる部屋の外のソファにいて電話で話しながら困った表情をしていた。僕は彼女の電話が終わるのを待つて話しかけようとしていたが、電話が終わると彼女は携帯を放り投げて泣き出してしまった。彼女がそうなっていることを知っているのは、僕以外にいない。みんな自分のことだけしか考えていないようだった。

僕はそつと部屋を出て彼女に近づいて声をかけた。

「どうしたの？」

僕の声に反応してミズホが顔を上げる。そして、目に涙を浮かべながらも、泣くまいと頑張って話を始めた。

「あのね、お兄ちゃんからだっただけだね。もう家に帰ってこいって言われちゃったの。私は帰りたくないって歯向かったの。せっかく好きな人を見つけたのに、帰れないって」

彼女の家はきつと門限が厳しいのだから僕は思った。彼女が、どこかお嬢様っぽい感じがするのはそのせいだと納得した。僕は、軽い気持ちで彼女の相談に乗った。

「好きな人がいたんだ？ だれ？ 僕が協力するよ。教えて」

「言えないよお」

彼女が大きい声を出して拒否をした。僕の好奇心がくすぐられて、彼女の好きな相手の名前が知りたくなかった。酔っている勢いも借りて僕はしつこいくらいに彼女に訊いた。そんな幼いやり取りをしている途中に彼女は腕時計を見て時間を確認した。

僕は帰っちゃうのかと思って残念がった。

彼女は自分の名刺に携帯電話の番号とメールアドレスを書いて、僕に渡してきた。

「だれに渡せばいいの？」

「また今度、二人つきりでご飯を食べようね」

そう言う彼女の顔を見て、ずっと眺めていたいという欲求にかられた。

「じゃあね」

遠ざかっていく彼女が、一度振り向いて手を振った。僕も彼女に手を振り見送った。急に僕も帰りたくなって時計を見ると十一時を過ぎた頃だった。

それから二人で会ってもいつもミズホは時間に細かかった。特に夜になるとうるさい。僕と会っていても、明日が休みでも、彼女は終電で帰る。僕と付き合っていて、一度も僕と一緒に夜を明かしたことがないのだ。そして、それが故に僕とミズホはプラトニックな関係を保っている。

ただ、それを僕は一度たりとも望んでいない。最近では、彼女が帰るのが当然だと僕も思っている。付き合った当初は、何かと理由をつけて一緒に居ようとした。ミズホは兄のことを話に出して僕の欲望を拒んだ。

今日は久しぶりに言ってみようと下心に僕は正直に従った。

「ねえ、今日は一緒にいたいな」

僕はそれとなく言ってみた。彼女は考え込んだ。僕はダメ元で言ったんだし、どうせ帰るに決まっている。僕はカクテルを飲みながら、残っていたシーザーサラダを自分の皿に盛って食べていた。

「いいよ」

呆気ない返事で、僕は全身がフリーズした。

「えっ？」

ミズホが恥ずかしそうに応える。

「いいよ。今日は」

「やったあ！！」

僕の心の叫びが落ち着いた雰囲気をついに台無しにする。それから、僕は一人で盛り上がりつつ強めのカクテルを何杯も飲んだ。彼女は嫌な顔を一切せず僕を受け入れてくれた。気がついたら彼女の腕時計もなくなっていた。

僕と彼女はその夜に初めて結ばれた。嬉しかったがお酒のせいで、記憶が曖昧である。

朝になって気がついたが、今日が月曜日で普通に仕事だったことを起きた時に思い出す。こんなことは今までに無かったし、僕が会社を休むなんて一年であるかないかだから仮病を使って、今日は休みにした。彼女はうまく起きたらしく、もういなかった。まるで、今まで一人でいたかの様に彼女の痕跡はなかった。

心配だったので、僕はミズホにメールを入れる。

せっかく、ずる休みをするなら平日の街を楽しもうとぶらぶら散歩する。いつも食べる牛丼屋も私服で行くと気持ちがちよっと変わる。ちようど食べ終わった時に電話がかかってくる。ミズホかと思つて楽しい気分電話を取り出す。そこには登録されていない電話番号が表示されていた。逡巡をした後に恐る恐る通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「もしもし？」と女性の声が出た。

「なんで、出ちゃったの？ あー、もう面倒くさい。でも、せっかくだから説明をしてあげる。あなたは真の愛についてどう思う？」

付き合っている彼女があなたの知らないところで淫らな行為をしている、彼女があなたのことを愛していたら、あなたは受け入れられる？ 自分の前で清らかだったなら許せる？ 包括的に人のことを

愛せますか？ 私は、あなたが出す答えを知っている。それで私はあなたを待っているの。あなたの純粹さがあなた自身を動かして、私を助けに来るの。待ってるよ。私は、継母や義理の姉たちがいじめる家庭やいばらの生えた城や高い塔のようなファンタジーなどころにはいないの。わかった？ これが私の言いたいこと。じゃ、よろしくね」

僕は一言も喋らずに電話が切れた。

そして、それから一週間以上もミズホからは連絡がなかった。

僕は彼女がいなくなってから、朝起きた時と昼休みに入った時にいつもメールをして、仕事が終わると電話を毎日かけた。メールの返信は返ってこないが、電話をかけるとコール音がする。

こんなことは付き合い始めてから一度もなかったことで、僕は心配をしたし、頭の中はミズホのことで普段以上にいっぱいになった。こんなことを言っても信じてもらえないかもしれないが本当のことだった。

仕事が予定より早く終わって、先輩から「せっかくの金曜日なんだから、みんなで飲みに行こう」と誘われたが、僕はそのグループに混じるテンションじゃなかった。いつもならミズホとこの後会ってご飯を食べる予定だった。帰り道に毎日やつてるおまじないみたいに、彼女に電話をかける。しかし何回かコールした後に留守番電話になる。

今日もミズホと連絡が取れなくて寂しい気持ちを抱えて僕は、電車に乗って自分の家のある駅に向かう。その途中でもものすごい空腹感に襲われる。

僕の体は正直でお腹が空いたら心配を横にどけてご飯を食べてしまおう。

空腹を我慢して、駅に着くと最近行くようになった商店街の片隅にある中華料理屋に入った。

ドアを開けると、椅子や机やカウンターの油で汚れてくすんだ赤

色と所々シミになっている壁紙のクリーム色が目にはいる。厨房では、やることがないみたいで壁にもたれかかっているおっちゃん、向かいに設置してあるテレビを眺めていた。

「いらつしやい」

覇気のない声で僕を出迎える。もし僕が美食家でそういう倶楽部を主宰している人間だったらこのおっちゃんはこういう対応をするのかと考えた。テーブルに置いてあるビニールが油でベトベトなメニューを開く。定食セットのページ、右の列の二番目を確認する。僕はこの二列三段の定食の欄を順番で食べると決めている。

「レバニラ定食ください」

「あいよ」

かったるような返事がして、おっちゃんは動き出す。お水はセルフだから、自分で取りに行く。一口飲んで口の中をニュートラルにする。おっちゃんは、さっきまでテレビに釘付けだった。何をそんなに集中して見ていたのだろうと思ひ画面のほうを見てみると、国民的アイドルグループが歌って踊っていた。僕より年上の人でも好きになっちゃうんだと思ひながら時間をつぶすために彼女たちを見る。

曲が間奏になって、グループの女の子たちが何人も短い時間で映る。

僕はある一人の女の子を見て息を飲んだ。

なぜなら、その子がミズホにそっくりだったからだ。僕は彼女がもう一度映らないかと注意深く画面を覗く。すると、その他の女の子たちもどこかしらミズホの面影があるように見えてきた。アイドルなんかまじまじと見たことはなかったが、いつの間にかみんながミズホに似ているような気がしてきた。

結局、僕が探していた彼女は二度と現れなかった。画面が切り替わると、サングラスをかけた司会者が次のアーティストの紹介を始めた。頼んでいたレバニラ定食も僕の元に、ちょうどよいタイミングでやって来た。

僕が定食を食べ始めるとおっちゃんがチャンネルを変えた。本当にあのアイドルが好きだったみたいだ。「だれ推し」なのかが心に引っかかってしまう。テレビでは、東京の下町を探索している番組がやっていた。それでしばらくご飯に集中できた。

ちよつと焦げたニラとレバーが、オイスターソースが混じった湯気の向うに存在感を示している。もやしの白が色使用的にも食感的にもアクセントになって、僕の胃袋は満たされていく。

僕が熱々の鉄分とミネラルを補給しているとお客さんが入ってくる音がした。グループで来たみたいで足音がたくさんした。僕は、そんなことより目の前のご飯を食べて本来の自分の問題に向き合わなければならぬと思っていた。すると足音が僕の方に向かってくる。

嫌な予感と言うのは、そう考えた瞬間から実現してしまう。

「すいません、シュンさんですか？」

若い男性の声が聞こえた。僕は「はい」と言って振り向いた。そこには、白衣を着て眼鏡を掛けた学者らしき男性がいて、後ろには筋骨隆々のスキンヘッドとテクノカットの男がいた。

「突然すいません。妹のミズホいつもがお世話になってます」

話しかけてきた研究者風の男が、ミズホの兄と名乗って僕に一礼をした。

「実は、シュンさんがきつとお困りだろうと思ひまして、ミズホの代わりに挨拶に来ました」

「挨拶？」

「はい。別れの」

「別れ？ どういうことですか？」

「大変、申し訳ないんですけど、もうミズホに付きまとうのを止めてほしいんです。あなたのおかげで彼女は失われてしまったんです」「ミズホが失われる」という日本語が僕にはしっくりこなかった。

「さっきから何を言っているのかさっぱりわからないんですけど」

「あなたが〇〇パーセント理解する必要なんてないんです。あな

たがミズホをあきらめてくれればいいんです。それにもうあなたの前に同じミズホはあらわれないことはありません」

奇妙な世界に間違えて入り込んだにせよ、リアルが歪んでパラレルワールドになってしまったにせよ、僕は全く今の彼の発言が受け入れられない。

「あなた、頭がおかしいじゃないんですか？ ミズホに会わせてくださいよ。ミズホから話を聞かせてください。もう一週間以上会ってないんです」

「それは無理です。あなたのせいでミズホは失われたんですから」

「話を曖昧にしないでください！ ちゃんと話してください」

彼は「はあ」と短いため息をして後ろの二人に入り口に立っておくように指示した。僕は真実を知りたいのに、物騒な展開になってきた。この店に居るのは僕と彼らだけになった。お店のおっさんはさつきから見当たらない。トイレにでも行ったのだろうか。

「テレビを見て何か気づきませんか？」

僕は、彼にさつきの音楽番組を見ていたことをどこかで監視されたみたいない気分になった。

「あんまり見ないんで、よくわかりません」

「そうですか」と呟いて、彼は厨房にあつたりリモコンでテレビの画面を変えた。

「この女性を見てどう思います」

テレビでは世界の各国の変わった行事の映像を見て、画面の片隅でリアクションしているグラビアアイドルの女性がいた。

「かわいいと思います」

「それだけですか？」

「そうですね」

「じゃあ」と言つて彼はまたチャンネルを変えた。

「彼女はどうですか？」

大きいセットのキッチンで二人の料理人が料理をしている。そこでリポーターをしている女性アナウンサーが映った。

「美人だと思います」

「本当にそれだけですか？ いいですよ、ぶっちゃけても。ミズホはここにはいないんですから」

彼は少しにやけた声で言った。

「いや、そうだとしても僕からのコメントはさっきの二つだけです」
「あなたは嘘をついている。大きな嘘だ。今、映った二人には共通して思ったことがあるはずだ。どこかしらミズホと似ていると。そうでしょ？」

僕の背筋が凍る思いだった。僕は沈黙することで肯定する。

僕は二人の女性が出てきてびっくりした。彼女たちは、ミズホに完全に似ているわけじゃなくてどこか何となく似ているのだ。そっくりなことを正直に伝える気にはならなかったし、似ていると見えるのは個人の見え方によるものだから言う必要ないと思った。

「ミズホという女性は特別な人間だったんです。具体的な話は避けますが、簡単に言えば全世界の女性のオリジナルで特別な人間と言えはわかってもらえませんか。その彼女をあなたが解放してしまっただんです。そのせいでミズホは失われたんです。わかってももらえませんでしたか？」

「そうだとしても、僕と彼女の関係にそれまで関係なかったじゃないですか」

「それはこちらでうまくコントロールしていたからです。ミズホは今まで一度も目をまたがずに家に帰ってきていた。それでバランスは保っていたんです。それが一週間前に壊れたんです。管理する側としては迂闊だったとしか言えません。でも、最近どうにか建て直しができました。それで、もうこれ以上あなたに邪魔をされたくないと思います。今日ここに来たんです」

「そんなのいいがかりだ！！ それにミズホはちゃんといるんだろ？ おかしいだろ？ 俺とミズホの関係に入ってくるのは！！」
「あなたは、世界の理に逆らっているんです。もうこれ以上は控えてください。ミズホという女はいなかったと忘れてください」

彼は僕にお願いするように頭を下げた。

そんなこと言われても僕は忘れることなんてできない。僕にとつてミズホという存在は大きかった。そんな彼女を忘れることなんてできない。

僕の気持ちは怒りへと変わっていった。コイツをぶん殴ってやると思つて、近づいていき腕を大きく振り上げる。しかし、振り下ろすことはできなかった。僕の腕はつかまれていたからだ。坊主頭の男が僕の腕をつかんでいた。男の力は強くて僕をそのまま押さえ込んだ。

「暴力という理性を欠いた行動は、慎んでいただきたいです」

「ふざけんな。お前に、僕の気持ちなんて解るわけないだろ」

「わかりますよ。愛おしい存在だったことは了解してます」

「軽々しく俺の気持ちを語るな」

僕はどうにかできないかと悪あがきをする。今度は、テクノカットの男も混ざってきて完全に動きが封じられる。

「しかたないですね。では、こちらで忘れさせてあげます。山田さん、佐藤さんよろしく願います」

「はい」と短く返事をして僕を抑えていた二人が僕の体から離れた。僕の正面に二人が立つと、テクノカットは右腕を坊主頭は左腕を弓のように引いた。まるで、サッカー漫画のツインシュートみたいな格好のパンチバージョンだった。二人のこぶしは見えないスピードで僕のボディに入った。僕は勢いで店の扉を突き破って道路に出た。全身が痛くて、思考することができなかった。意識が途切れる寸前に白衣の男が耳元でささやいた。

「これで懲りてください。もし、次やったらこれ以上あなたを痛めつけます。今回であなたが諦めてくれると思つて救急車を呼んでおいたので、しっかり治療してくださいね。それじゃあ、失礼します」

その言葉を聞きながらなんとかコイツに歯向かう努力をしたが、指一本も動けなくて、白衣を汚すこともできなかった。

その日の怪我は全身打撲で全治一週間。会社には本当に怪我をして休むのにいらぬ背徳感で電話した。最初はクビになるかもしれないと思っただけ、診断書を提出するように言われて事なきを得た。入院は実質三日で、残りは自宅療養だった。その間にテレビはたくさん見たし、ミズホらしきそっくりさんもたくさん見た。

でも、あの時のアイドルグループの彼女は一度も見ていない。そういう番組を見たが出ていなかった。これから、会社に復帰してもしかしたら見逃してしまうかもしれないと思って、ハードディスクレコーダーとニテラの外付けハードディスクを買った。

平日のゴールデンタイムはだいたいテレビを見ることができないので、週末の一日を使って一週間貯めた番組を全部見る。はじめのうちには、頭から最後までチェックしていたが、段々と早送りをするようになった。彼女たちだけでやっている番組は終わりまで油断できないが、音楽番組のゲストだと十分くらいしか出演しないので、そこだけ確認して、見つからなかったら作業時間の短縮のためにその出番が終わったらすぐに消去をする。

そんな生活が一ヶ月続いた。僕はミズホを探しているのか、ミズホに似た人間を探しているのかわからなくなっていた。でも、目的として中華料理屋の一件である博士みたいな男の手からミズホを取り戻したい衝動に駆られていた。

ある日の仕事帰り。新入社員が研修で入ってきて、そんな季節なのかと思っていた。年々、時間というものが加速しているような気がすると同僚と喋って、仕事のおかげで自分が少しは保ててるとか思いつながら家に着いた。着くやいなや電話が鳴った。仕事で何かあったのかなと思って、取り出すと「知らない番号」と表示されていた。ミズホがいなくなった日に電話番号を登録していた。僕は一回深呼吸をして通話ボタンを押した。

「もしもし？ この前より潔く出たわね。それは褒めてあげる。でもね、あなたが自分自身の行動に疑問を持たなくていいのよ。あな

たの行動は概ねその方向に動いてるから大丈夫。あなたはこれから大変な目に遭うの。こういうことは先に言っておく。この話はエピソードで、どこまで続くかわからない。そんな話なの。あなたは、これからあるテレビ局に行くの。そうね、汐留のテレビ局。そこで、彼女があなたを待っているの。せつかく、今やっているテレビの情報を横流ししているんだから、ありがたく思いなさい。今すぐ確認して、行きなさい。録画で週末に観るなんてもったいないから。じゃあね」

テレビにスイッチを入れてテレビ番組を確認する。眼鏡を掛けたコンビの芸人がマイクを持って話をしている。

「テレビをご覧のファンのみなさん、今回選抜されたこのメンバーはあなたの力を必要としています。今から、番組終了十五分前までにここ汐留テレビ局に来てください。そして、彼女たちに降り掛かるパイから守ってください。それだけです。あなたが真のファンであることを証明する絶好のチャンスです。あなたのパワーをあの子たちは待っています」

そう言い終わると、メンバー一人一人がカメラで抜かれる。懇願する女の子たちの中に彼女はいた。彼女も他の周りの子と同じような感じでカメラをじっと見つめていた。でも、僕にとって彼女は違うように思えた。オーラとか雰囲気とかそんなじゃなくて、もともと僕の横にいるはずの女性だったという自分勝手な思いだ。

僕は草野球で使っているバットを持ち出して、着替えずに急いで駅に行きテレビ局に向かった。電車がこんなに遅いとは思わなかった。自分の足を使えば、電車より早く行くことができるんじゃないかと考えられた。

やっと駅に着いて僕は駆け足で改札に向かった。改札の向こうからサラリーマンの群衆がやってくる。スーツの群れを掻き潜りテレビ局に向かう。僕の足は自然と速くなる。

テレビ局は曇りのせいとか、悪の巣窟、悪魔の塔のように見えた。その中に入って行くと奇妙な光景が広がっていた。

マツチを売る少女がいたり、赤い頭巾をかぶった女の子が彷徨っていたり、木の人形が歩いてきた。僕はここは別のところにあるアミューズメントパークに来てしまったようだった。さつき見た番組のスタジオの場所が看板で出ている。それを頼りに局内の奥に進んでいく。さらに進むと変な人間がどんどん増えていく。パソコンを片手に持ちながらも片方の手で入力しながら歩く人、周りの人間にむかって鞭打つ女王様、二足歩行の忍者亀。僕はテレビの世界は知らないが、これが普通なんだと思った。

もし、僕に危害を加えるならバットで一撃加えてやろうと心配していたが、そんな危機的状况はなかった。

スタジオに着くと、やる気のないスタッフが長机にだらけた格好で椅子に座っていた。スタッフが僕の存在に気づくと立ち上がって迎えた。

「番組に参加される方ですか？」

「そうです」

それから出演の際の説明を細かくされる。途中で彼は僕が持っていたバットケースをちらちら見ていた。

「あの、私物の持込は禁止されるのでこちらで預かりますね」

僕はしぶしぶ了承をした。僕のたった一つの武器を取り上げられたみたいで、寂しい気持ちになった。

僕は出番になるまでスタジオの片隅で待たされた。鉢巻きを頭に捲いたり、法被を着たりする人が暴れ牛のごとく息巻いている。それに対して僕はスーツ姿で会社の帰りの普通のサラリーマンにしか見えないだろう。自分が来る場所を間違えたかのような錯覚に陥る。

「だれを守り来たんですか？」とさつきの祭りの格好の男たちに訊かれるが、僕が名前を言うと「敵ですね。よろしくお願いします」と握手を求められた。僕はルールがわからずに握手をする。人によつては、握手がない場合もあった。

さつきの受付のスタッフよりも、幾分威厳のあるスタッフが集まっている僕らの前にやってくる。

「えー、これからの流れを説明します。まず、出演者にそれぞれ何人集まったかをアナウンスします。その後に、司会者が一番少ないアイドルの名前を言つて、笛を吹きます。そして、みなさんは守る側と攻撃側に別れます。攻撃する側はあらかじめセットに用意されているパイでターゲットのアイドルを狙ってください。そして、守る側はこちらもセットに用意されているプラスチックの盾で守つてあげてください。以上、簡単になりますが説明を終わります。なお、あまりも行過ぎた行為に対しては、退場や場合によっては法的処置をとります。テレビのショーなので、みなさんくれぐれもはめを外さないようにしてください。それでは、係の者の指示に従つて移動してください」

僕は彼女を守ることにしか考えてなかった。移動している時にどこに盾があるのかをチェックしていた。セットに入つてすぐ左。つまり、入場者からすれば右にあることがわかった。

僕たちは城門イメージして作られたセットの裏にいる。格子状に組まれた板があつて、まるで簡単な檻に入られているようだった。真正銘のフアンの人達に囲まれたら、催眠効果なのか僕も一ファンだと思ひ込んでしまう。人数のアナウンスが始まるとみんなで一喜一憂した。ある種の団体芸みたいだった。そして、ミズホにそっくりな子と少しぶりっ子入っている子の一騎打ちになった。みんな、ぶりっ子のアンチなのかヤジが飛んでいる。しかし、ぶりっ子もその言葉をうまく面白いコメントで返す。それで出演者が笑っている。でも、きつと一番気が気じゃないのは僕なのかもしれないと思つた。

そして、名前が告げられた。その瞬間、僕は完全に自分の全部を投げ打つて彼女のことを死守しなければと思つた。

一斉に人間が動きだす。みんなパイを持って攻撃に回った。僕は盾を持って彼女の元へと急がなければいけなかった。彼女はもうスタジオの隅にいて、何発かパイを食らっていたが致命傷になるほど顔や衣装にダメージを負つていなかった。

「これ持って、スタジオを出て先に逃げて。僕は後ろを守るから」
「えっ」と彼女は一瞬戸惑った。僕はその顔がミズホと似ていて嬉しくなった。

「早く」

と僕が急かすと彼女は盾を持って走り出した。パイを投げる人間も少し戸惑ったようで、何秒間手が止まった。その間に彼女はスタジオの出入り口の方に行っていた。僕も後ろに続く。僕は彼女に防具を渡してしまったので、無防備である。でも、彼女にとつて僕自身は盾になればと思った。後ろを振り返ると若干名の僕の仲間が守ってくれていた。彼らにもものすごく感謝した。

遅れて僕がスタジオの出口に着くと受付にいたスタッフに尋ねた。「さっき預かって貰った荷物どこにありますか？」

クリームまみれの僕は鬼気迫る勢いだったので、彼が気圧されていた。荷物を探し出して僕に手渡した。僕は彼に礼を言つて、彼女を追った。彼女は廊下を駆けていた。

「どこか隠れるところあったら入って」

僕の話にうなずき、彼女は女子トイレに入った。僕は一瞬戸惑ったが、一か八かで彼女に付いていった。

入ると彼女以外になくて僕は安心した。

僕と彼女はこの場所に来るまでに体力を奪われたらしく、膝に手をついて呼吸を整えた。自分が年を取ったのか、それとも最近の運動不足のせいなのかかなり息が上がってしまった。これはテレ

「あの、なんで私のことを心配してくれるんですか？ これはテレビですよ。私はあそこでパイまみれになることで、番組的にはオツケーなんですよ」

「僕は君のことが心配なんだ。君にそっくりな人が失われてしまったんだ。君が彼女の代わりと言ったら恥ずかしい話だけど、僕は君のことが気になってしかたないんだ」

「おかしな人ですね」と彼女は笑みを浮かべて続けて言った。

「そんなこと今までにファンの方に言われたことないですよ。それ

に『失われる』ってなんか変な話です」

「僕も変な話だと思う。夢だと今でも思ってるよ。ずっと僕は悪夢のような日々を送っていたんだ」

「でも、あなたの顔って、私の記憶の片隅になんとなくあって、見覚えあるかもって思ってるんです」

「気のせいだよ。そんなの嘘だ」僕は謙遜めいたこと言う。現実として受け入れられたくない気持ちがあるからだ。「これは何かの間違えだ」と頭の中で繰り返す。その一方で「これが夢ならなんでもできる」と思つて、ダメもとで僕は彼女に頼みごとをする。

「もし、よかつたら君を抱きしめたいんだ。そうすれば、僕は失われた彼女を僕の心の中だけに仕舞えるかもしれない」

彼女は恥ずかしそうにしてうつつむいた。そして、小声で「いいよ」と許可してくれた。

僕はその言葉で胸が高鳴った。まるで女性を知らない男性みたいに僕は緊張をしている。彼女がアイドルだから自分が構えてしまつているとも考えられる。

許しを貰った後、僕は彼女に体を近づける。彼女も僕から顔をそらして、わずかに体をこちらに寄せてきた。もうすぐで彼女を抱きしめられると思つた。体に電気が走つたような快感で震えがした。このまま彼女を僕のモノにしてしまいたいと思つた。

そんな甘い一時はトイレのドアが開く音で破壊される。

「楽しい時間を過ごせましたか？ でも、もうこれ以上はいけません」

白衣を着た男、ミズホの兄とこの前のテクノカットと坊主頭の男二人が立っていた。

「いやあ、探しましたよ。意外と近いところに隠れてたんですね。灯台下暗しつてヤツですか」

彼は楽しんで言っているようだった。それが鼻について腹が立つ。僕は抵抗するために背中に背負っていたバットケースから、バットを取り出して、剣士のように構える。

「あなたは初めて会った夜に酷い目に合っているんですよ、懲りないんですね。では、もう一度教えるしかありませんね。山田さん、佐藤さん、よろしくお願いします」

二人の男が前に出てくる。以前、コテンパンにやられた記憶がよぎる。僕にはホームランを打ったバットがあると自分に言い聞かせる。

相手は、僕を牽制しているのかジャブを多用しながら攻撃を仕掛けてくる。僕はバットで相手のパンチを当てに行く。バントの要領で、バットを両手で持ち、自分に来るパンチを当てていく。

女子トイレは男子トイレよりスペースが狭いから、相手も僕を挟み撃ちに出来ないでいる。坊主頭が焦ってきて力が強くなる。僕も押されて、少しよろける。さらに強いパンチが来てもろに食らう。そのスキを見て、二人が並ぶ。左右の別々の利き腕を引いてこの前のツインパンチを繰り出した。僕はそれにもろにくらいダウンする。

しかし、僕はバットを杖代わりにして、なんとかふらつきながら立ち上がる。弱っていると見た僕を痛めつけようと、二人がさらに追い打ちで攻撃してくる。

二人が同時に大きく振りかぶる。さつきより引きが大きい分、僕はタイミングを取りやすかった。僕も小さいながらバッティングの構えをする。二人がパンチを繰り出すタイミングで僕はバットを勢い良く振る。

金属バットの快音が鳴り響く。バットに骨が折れる感触が伝わる。その感覚は決してホームランを打った時とは違う、気持ちいいとは言えないものだった。

二人の男がうずくまる。そこを見計らって、僕は二人の頭を思い切り叩く。頭蓋骨が陥没するのがわかった。二人は気絶して動かなかった。

僕が二人を倒したと思って、軽く息をついた時に僕の頬に何かかすった様な気がした。手を当てて、水っぽい感触がしたので見てみ

ると、軽く一文字に切れた痕があった。

「きや」と後方で彼女の声があった。振り返ると彼女の近くに銀色に光るものがあつた。メスだった。

「まさか、二人を倒すとは思いませんでした」

メスを片手に喋るミズホの兄がいた。僕はバットを構えるが、さつきの戦いでバットがベコベコに凹んでいる。僕がどうしようかと逡巡している間に敵はどんどん近づいてきて、僕は後退を余儀なくさせられる。背後にいた彼女の近くまで来てしまった。

「もう、逃げる場はなんですから黙って彼女を返してください」

男はメスを見えない速さで投げる。僕のスーツの右肩付近に刺さり、勢いで壁に貼りつられる。それに気を取られて二波三波に気づかなかつた。僕の左肩と右足に掠めて着ているものを貫通して、壁に密着する形になる。

「これでいいでしょう。さつ、お嬢さん行きましょう」

白衣の男が馴れ馴れしく、彼女に手を差し伸べる。

「いやっ！ 私はこの人と一緒にいる。それより。あなただれなの偉そうにさ。聞いててむかつくんですけど。ヒーローとか気取ってんの？ この人のほうがよっぽどヒーローなんですけどっ！」

「わがままですね。あなたが来ないと、この人がどうなっても知らないですよ」

メスが飛んできて、左足を壁につなぎとめた。

「ひどい」と彼女は言い放った。

「私はこの人と一緒にいる。あなたに屈したりしないわ」

「ジャンヌダルクみたいですね。いいでしょうあなたが来てもらうように仕向けるしかありませんね」

彼は白衣からメスを一本取り出し、僕の体の真ん中にある臓を狙う素振りをした。何もできない自分が恥ずかしかつた。このまま、僕は死ぬんだと目をつぶって覚悟を決めた。その時だった。

彼女の声が聞こえた。

恐る恐る目を開けると彼女が僕の身代わりになっていた。彼女は

崩れ去る。

「なんてことだ」

彼は自分のやったことを悔やんだようだった。

僕は何も言えなかった。僕が目を見開いて倒れているのを見ていたら、どんどん憎しみの気持ちがおみ上げてくる。今までに感じたことのない感情が僕を奮い立たせていく。

「うおおおおお□×◎#▲\$☆※ッ！」

僕は張り付けられていた壁から自分を引きはがした。そして、男の元に駆け寄る。男の首根っこを持ち上げ、地面にたたきつける。そのまま男に馬乗りになって顔だけを集中的に殴りつけた。どれくらい殴ったかは、覚えていない。僕の気が済むまで殴り続けた。感情の解放が終わると、僕はいつの間にか泣いていた。

彼女に近づいて、もう一度抱きしめる。今までの彼女とミズホの思い出を思い返し、僕はそれらをあきらめることを決意する。

そして、彼女が少しでも長く生きられるようにトイレの個室に隠した。

僕が完全にミズホを忘れるための儀式として、次の休みにミズホのマンションを訪れた。ミズホが失われたにも関わらず、部屋がまだあるかどうかは賭けだった。ミズホの部屋には何回か行ったことがある。女の子らしい、カラフルな彩りの部屋だった。外国の映画のポスターが貼ってあったり、テレビの上には僕との写真があったり、この部屋は主をまだ待っているようだった。僕はその一つ一つを見つめ、手に取って彼女との思い出に浸っていた。

だけど、僕は前に進まないといけないと思った。ミズホに似た彼女の死で僕は一歩前に入る決断が出来た。最後に彼女たちに別れを告げるために、そして、彼女の生きていた証を、何か形見のものを貰いにやってきた。

言い方は悪いが僕は彼女の部屋を軽く物色していた。

「泥棒ですか？ 本当にあなたとは、何かと縁がありますね」

振り返ると、顔に包帯を捲いた白衣の男が立っていた。声から察してミズホの兄だと思った。

「なんで、いるんですか？」

僕と彼の声がシンクロする。しばらくの間が流れる。

彼の方から話します。

「いえ、監視カメラにあなたが映ったからここに来たんです。別にもうあなたに危害を加えることはしませんよ」

「大丈夫です、もうあなたとは関わらないと思います。ミズホがいないことを僕は現実として受け止めます。だから、今日は忘れ形見を貰いにきました」

「そうですか」と言つて軽く彼は笑っていた。

「あなたがそうしてくれるととても助かるんです。もう、ミズホという人間はいないのだから、これ以上問題を大きくしてくれないで欲しい」

「わかりました。約束します」

「じゃあ、忘れ形見とやらを持つていつて好きな時に出て行ってください。この部屋は引き払うつもりです。ここはもうなくなりまます好きなものを持つていつてください」

「はい」

「もう二度と会わないことを祈ってますよ」

白衣の彼は出て行った。それからどれくらいその部屋にいたか見当もつかなかった。部屋を出た時には日が暮れていた。

僕は彼女とデートで行った遊園地の非売品である小さいオルゴールの宝箱を貰って帰ってきた。

その日を境に僕は普通の日常に戻った。

仕事に行き、同僚と飲んだり、たまには合コンに行ったりした。でも、毎日寝る前にオルゴールを聞いて寝ていた。時々、僕の核心に迫る夢を見てうなされて起きた夜もあった。

ある金曜日の朝、僕はその日は目覚めが良くて、気分も良かったから滅多に作らない朝ご飯なんかを作ってみる。近くの百円均一の

コンビニで卵とハムと千切りになっているキャベツなんかを買ってハムエッグを作って満足する。ご飯を食べていたら携帯電話が鳴った。出勤前から電話をかけてくる友人や同僚を僕は知らない。

着信番号は「知らない番号」だった。通話ボタンを押す。

「もしもし？ よくもまあぬけぬけと電話に出たわね。信じられない。忘れるために努力しようとしてもダメ。あなたは縛り付けられているの。それを感じないだけで、自由になったと思ってるようじや、あんたもまだ中途半端なのよ。口だけの男なのよ。自分に嘘付いている日々は楽しい？ そんなものを見させられても全然面白くない。もっと面白くしてあげる。いい？ 今からテレビをつけなさい。チャンネルはどこでもいいわ。わかった？」

僕は無言でテレビをつける。朝のニュースで芸能情報をやっていく。アナウンサーが軽快な喋りをしている。

「次のニュースはこちらです。今日、一面の新聞もあります、有名女優に熱愛スクープです。しかも、お止まりデートの現場を週刊誌が直撃しています」

画面が切り替わる。

フードを被った女性と白衣を着た男性が映っている。よくよく見ると、男の方はミズホの兄だった。そして、フードを被った女性をちゃんと見ると、ほとんどミズホにそっくりな女性だった。こちらの方が、大人の色気があってミズホより美人である。ミズホは年より幼い感じが良かったが、こっちの方が好みかもしれないと思った。電話から声が聞こえる。

「うふふ。ビッチな感じがする？ それともこのニュースに禁断の愛見つけちゃってる？ あなたがこれを知って、頭も下半身も興奮したのがわかったわ。そして、あなたに衝撃を与えられて満足しちゃった。あはは。さあ、迎えに来る口述が出来たわね。待ってるから今度こそ本当の恋をしちゃいましょう。じゃあね」

電話が不通になる。しばらくは思考が停止して動けずにいた。そして、僕は動き出す。

玄関にある、バットケースから新調したバットを取り出す。そして、ミズホの忘れ形見のオルゴールを何度も叩く。みじん切りをするみたいにモノの原型がなくなるまでバラバラにする。

テレビを見るとまださっきのニュースにコメントーターがなんか言っている。僕は、さっきの女優をパソコンで調べて、所属事務所を調べる。事務所がわかったらその所在地を調べて、周辺の地図をプリントアウトする。それを持って、僕はバットを再び持って玄関に向かう。

玄関を開けるとさつき買い物に出で行った時より日差しが強くなっている。そんな清々しい朝の中、僕のミズホを巡る戦いは第二章に突入した。

〈了〉